

連載「わたしの福祉論」(165)

続・多文化社会のまなざし

王立メルボルン工科大学 客員教授

八巻正治

私は昨年三月下旬にニュージーランドのクライストチャーチを訪れました。クライストチャーチは、二〇一一年二月二十二日に大震災が起きた場所です。偶然ですが、その翌日から私はニュージーランドの首都であるウェリントンを訪問したのです。そして知的制約者の権利擁護組織である「IHCC」の本部に設置されている図書室に通って、ニュージーランドが大規模収容型福祉施設から施設解体・閉鎖へと向かう歩みをIHCCの機関誌の記事内容を通して把握しようとしていました。まさか、それから半月あまり後に、三月十一日の大災害が生起するなどは予想だにしませんでした。

そこで今回は、オーストラリアでの生活体験をもとに、多民族・多文化国家としての成熟したまなざしについて綴ってみたいと思います。

支援サービスの在り方

前回のエッセイでも紹介しましたが、現在、私が生活しているのは、メルボルン市内から車で三十分ほどの郊外に位置しているプレストンという小さな街です。多民族国家であるオーストラリアの中で、もっとも多民族・多文化が顕著なのがメルボルンですが、プレストン地域は、実に一四八の異なる言語を話す、一五三カ国以上の国々からやって来た人たちが生活している、オーストラリアの中でも多民族・多文化が、とりわけ顕著な地域です。もちろん先住民族であるアボリジニの人も数多く生活しています。そうしたこともあり、地域の行政サービス機能では、六カ国語での対応がなされるように配慮されています。

プレストンには大きなマーケットがあり、そこに行くくと、数多くの、さまざまな民族の人たちが行き交い、さまざまな言語で話し合っている場面に出会います。私はそうした躍動的な雰囲気が好きで、毎週のようにこのマーケットに行くのです。さて、日本でも難民受け入れ問題が話題にのぼっていますが、オーストラリアでは一万二千名のシリア難民の受け入れを表明し、その内の四千名あま

りを、メルボルンを州都とするビクトリア州に迎え入れるとのこと。それを円滑に進めるために、過日、行政機関による説明会が開催されました。その案内には「オーストラリアは難民保護を提供することによって、世界的な市民としての役割を果たしている」と書かれてありました。これが成熟した多民族・多文化国家としての望むべき姿なのだと思います。

日本政府が難民の受け入れに消極的なのは、そのことよって、大袈裟に言えば国家としての安定性が脆弱(ぜいじゃく)になることを恐れているからです。さらには行政サービス等が煩雑さを増すからです。

さて、こうした配慮や行政サービスの在り方は、社会的困窮者や機能的な制約状態を有する人たちへの対応原則と類似していることに気づきます。例えば私自身は、現時点では聴覚(聴力)的な側面には著しい制約状態を有してはいません。しかし日常生活を過ごすうえで、言語的な理解力が不足しているために生活上の困難を抱えざるを得ません。すなわち、音声としては英語が私の耳に入ってきたとしても、それを意味のある言葉として私自身が認識できないことが多いからです。ですから、もしも英語のみの対応しかなさなかった場合には、私を含めて言語理解力が乏しい住民たちは、それによって、例えば安全保障面や医療面で深刻な事態を招く危険性が生じてくるこ

ともなるのです。
あるとき旅先で病気にかかり、私は近くの医療クリニックを受診しました。しかし医学的な専門用語が理解できずに、とても困りました。すると医師が私に「日本語の通訳者が必要か？」と聞きました。「もちろんです」と答えました。それを聞き、医師は電話を掛けて日本人の通訳者を呼び出してくれました。電話機のスピーカーを通して医師の語る英語を日本語に通訳してくれたのです。とても助かりました。ただし、あとで聞くと、すべての医療機関がそうしたサービスを提供しているわけではないとのことでした。

多文化共生社会のまなざし

私がこちらで通っているキリスト教会では、行政機関からの補助金を得て、きわめて低額に設定された料金で、週に四回、地域の人びとへの昼食支援サービスを提供しています。食事を作るのは求職中の人たちです。
その昼食会には地域住民をはじめ、移住者さんたちが集います。その多くは高齢者たちです。さらには、車いすを使用する人や、知的制約を有する人たちも支援スタッフと共に参加します。その人たちとの親しい交流は、私に大きな満足感を与えてくれます。見ていると、同じ出身国の人たち同士が、同じテーブルに集まることが多いみたいです。そして慣れ親しんだ母国語で

思う存分に語り合っています。

さて、私はこれまで「インクルーシヴ社会の構築」をテーマとして学びを深めてきました。言葉を換えるならば、多文化共生社会の構築ということですね。その実現のためには、それが個人であれ、集団であれ、あるいは組織体であれ、国家であれ、互いの主義主張を繰り返しては、なかなか一致点を見いだすことはできません。「ここが違うから一緒に歩めない！」ではなく、「この部分が共通するから一緒に歩める！」といった、「排除」ではなく「受容」の視点が何よりも大切だからです。多民族・多文化国家の円滑な運営には、この「折り合い」が大切であることを私はオーストラリアで体験的に学びました。折り合いとは安易な妥協ではなく、相手の考え方を尊重したうえで、の相互理解のまなざしであることを学んだのです。
確かに国家としての安定性を考えたならば難民や移民たちの定住を制限した方が都合が良いであろうことは理解できます。しかし地球規模で考えたならば、ひとり日本のみがそうした閉鎖的な政策を保持し続けることには大きな疑問を抱かざるを得ません。それは世界から尊敬される国家には決してなれないからです。

幅のあるまなざし

私はこれまでニュージーランドへの

訪問が多く、一年間の滞在を含めて、計十七回になりました。ニュージーランドは先住民族であるマオリ民族をはじめとした多民族・多文化国家を構築してきました。そのため、公用語も英語とマオリ語、そして手話です。

それに対してオーストラリアの場合、移民政策を推し進めてきたこともあり、多民族化がいっそう顕著です。そのため、言語や文化的背景が異なる住民たちへの手厚い支援が必要になってきます。そうした支援政策は、一見すると余分な手間を掛けているようにも思えますが、実はそうではないことが次第に理解できてきたのです。

メルボルンは路面電車(トラム)が特徴で、私自身も毎日のように利用しています。電車内の光景を眺めていると、ほのぼのとした雰囲気を、そこに感じるのです。車いすを使った人の乗降の際には、周囲の人たちがそれとなく視線を投げかけます。それは高齢者人に対しても同じです。お互いの在り方に関心を持ちながら生活していることを強く感じます。
多民族・多文化国家では、何事もスピーディには物事が進みません。しかし、その分だけ人びとの心の中に、配慮が含まれた、幅のあるまなざしが生まれるような気がするのです。
オーストラリアで感謝に満ちあふれた一年間を過ごし、間もなく私は日本に戻ります。